

校 園 名：岩手大学教育学部附属特別支援学校

所在地：〒020-0824 岩手県盛岡市東安庭 3 丁目 4-20

電話番号：019-651-9002

記載日：平成 28 年 5 月 19 日

記載者：佐藤 信

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

昭和 49 年 4 月に附属小学校及び附属中学校特殊学級を改組し、附属養護学校としてスタートした。翌年、昭和 50 年 4 月に高等部を設置し、小学部から高等部まで児童生徒が一貫した教育を受けることができる学校となった。平成 19 年 4 月に附属特別支援学校に名称を変更した。



本校は、盛岡市の南側にある住宅地に位置し、盛岡市内や近隣の矢巾町、紫波町などから児童生徒が通学している。

本校の学校教育目標は、「現在及び将来の社会生活において、主体的に、そして豊かに生きる人を育成する」であり、具体的な児童生徒の姿を①やりがいをもって意欲的に活動する人、②自分の力で取り組む人、③自分の役割に進んで取り組む人、④精いっぱい活動し、満足感、成就感をもつ人、⑤仲間とともに協力する人、⑥心身ともに豊かに生きる人、として授業実践や教育研究に取り組んでいる。

貴校の卒業生の活躍状況について：

平成 18 年度から 27 年度まで 10 年間の本校高等部の卒業生は 73 名おり、その進路は、一般就労が 2 名、福祉的就労が 42 名、自立訓練等の福祉サービス利用が 24 名、施設等の利用が 5 名となっている。卒業後の状況については、進路先の地域福祉関係者・事業者とのネットワーク会議に参加して現在の状況について情報交換し、アフターケアに活用している。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校から転出後の最終的な役職等については、2 年に一度開催する OB 会の名簿整理の際に、現在の役職等について調べている。各役職等の人数は下記のとおりである。

	校 長	副校長 (教頭含む)	指導主事 (研修指導主事含む)	主管教諭	指導教諭	大学教授等	合 計
人 数	40	8	3	0	1	2	54

※H28.4.1 現在の役職（退職者については、退職時の役職）。

本校から転出する際には、一旦県立学校籍に戻り、その後、指導主事や管理職試験に合格した後、管理職として登用される。県立特別支援学校は、県内に 13 校しかなく、狭き門であるが、これまで多数が指導主事や管理職として本県特別支援教育を牽引してきている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどに

ついて：

＜学校公開研究会＞

2年毎に学校公開研究会を開催し、またホームページ等をとおして、研究成果を県内・外に発信している。昨年度の公開では、県内参加者が75名、県外参加者が48名、合計123名の参加があった。その他、日本特殊教育学会等での発表を行った。

＜学内連携＞

「スクリプトを活用した会話（コミュニケーション）指導研究」（共同研究）で他学部（理工学系）の協力を得て、ICTを活用した教材開発を進めている。

学部GP（Good Practice）として、教育実践と結びついた教育研究の充実を図るため、学校と教育学部の先生との共同研究事業を行っている。今年度は、4本の研究に取り組んでいる。

大学主催の特別支援教育セミナーに協力し、附属四校園に係るユニバーサルデザインを活用した授業づくりについて地域に発信した。

＜地域とともにある学校＞

小学部高学年児童と睦寿会（老人クラブ）との交流を、畑作業や「わくわくオリンピック」、「あにわ祭」への行事参加など年16回実施している。

中学部では、地域にあるリンゴ農園の協力により、春と秋の年2回（1回1週間）下草の刈り取り作業を行っている。その関係で、枝払いした枝をもらい受け、作業学習で作る製品の材料となっている。また、市内の小中学校合同運動会等に参加し交流を行っている。

高等部では、老人ホームとの交流を年1回実施している。また、作業製品の販売会を年2回市内のスーパーで行って地域の方達との交流を図りながら、生徒の充実感や自己有用感を高める機会となっている。

これらの取組をとおして、本校への理解と連携が図られ、地域の学校、地域の子どもとして位置付いている。



＜小学部 睦寿会交流の様子＞



＜中学部 果樹園での作業＞



＜高等部 老人ホーム交流の様子＞



＜高等部 ガンプ工房（作業製品）販売会＞

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

附属幼稚園・小学校・中学校への支援、近隣の幼稚園・保育所、小中学校、高等学校への支援や研修会への対応、近隣市町村の就学支援委員会の委員・巡回相談員を担当している。昨年度は、124件の相談支援・研修対応等があった。また、地域の特別支援教育の充実を図るために、本校が主催して「支援部学習会」を年9回計画し、近隣の幼稚園・保育所、小中学校、保護者を対象に特別支援教育への理解の促進を図るなど、地域から本校への特別支援教育のセンター的機能に対する期待は大きい。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本県において、特別支援学校の教員を養成する大学は本学だけである。また、県内の特別支援学校の設置数が少なく、広い県土に点在していることから、教育実習生を十分に受け入れることが難しい状況にあり、本校が教育実習校としての役割を果たす意義は大きい。同様に、大勢の介護等体験を実施できる特別支援学校は本校だけであり、今年度は6回に分けて、約230名を受け入れる。

また、研究については、学校教育の中心である授業づくりに焦点化し、障がいのある児童生徒が主体的に活動する授業について、県内外の特別支援学校に向けて発信する意義は大きい。